

災害・被ばく
医療科学共同専攻の
川内村実習

原発事故の 支援で得た教訓を 世界に伝える

災 害時などにおいて、被ばく医療
に
対応できる人材を育成する必
要性はかねてからありました。それに
応えるのが、2016年に新たに作ら
れた長崎大学と福島県立医科大学との
共同大学院「災害・被ばく医療科学共
同専攻」です。

福島の支援においては多くの技術やノウハウが蓄積されました。
こうした知識は、ほかにはない災害・被ばく医療に対する
教育を可能とする基盤となるものです。
2016年、長崎大学は福島県立医科大学と共に
修士教育を行う共同大学院を開設しました。

世界から留学生を招く

初期から福島でリスクコミュニケーション
シヨンの支援に当たった折田助教
は、「医療分野においては、医療現場
で使われる放射線から身体を守る放射
線防護学が発達し、人材育成も行われ
てきました。一方で、放射線の外部被
ばくや内部被ばくへの対応を専門とす
る被ばく医療学については、人材育成
が十分ではありませんでした。そのた



川内村での実習に参加した「災害・被ばく医療科学共同専攻」の
学生とジャック・ロシャル教授(左から2人目)

め、原発事故が起こったときに、どう
対応していいかわかる人がいませんで
した。その結果として、行政も住民も
混乱したという反省があります」と振
り返ります。

長崎大学は、災害・被ばく時に適切
対応できる人材が圧倒的に不足してい
た反省から、福島における支援を通し
て必要な技術やノウハウを現場で確立
し、福島県立医科大学との共同大学院
の設立にたどり着いたのです。

この共同大学院には「福島原発事故
の教訓を、世界のリスク管理に活かす」
という方向性が据えられています。

共同大学院は、医学コースと保健
看護学コースに分かれています。長崎
大学と福島県立医科大学それぞれに1
学年10名程度、うち医学コースと保
健看護学コースに各5名程度の定員と
なっています。また、平成31年度から
は鹿児島県の鹿児島純心女子大学構内

生たちは、勉強してきたつもりであつて
も、実際に被災地を訪れ、現場を目の当
たりにすると、言葉に表せない感情や感
覚が沸き上がり心に突き刺さります。
それが、学びへの意識を深化させます。

川内村では、国際放射線防護委員会
(ICRP)副会長のジャック・ロ
シャル教授も実習の指導を行いま
す。ロシャル教授は、放射線防護ば
かりではなく、街づくりなど、社会的
な問題にも目を向けさせます。そうし
て視野の広がった学生の問題意識に
よって、遠藤雄幸村長とのディスカッ
シヨンの小学校での異文化交流、森林
でのモニタリングなど、実習内容は変
わってきます。川内村での実習は、教
員による教育というよりも、地域のリ
アルの声に触れてもらうことを教育の
中心に据えていることが特徴です。

理に貢献したいという共同大学院のね
らいがうかがえます。

川内村で 原子力災害の教育

共同大学院の学生にとって教材は、
福島という現場であり、学生は現場で
自分のしたいことを考えて実践しま

す。元々職業に就いている学生が目的
意識をもって参加しているので、学習
意欲は極めて高く、様々な視点から課
題解決の道を探ります。

実習地のひとつである川内村では、
原発事故後の取り組みを学ぶ機会を持
つことができます。長崎大学が行って
きた、「戸別訪問」、「車座集会」、「線量
マッピング」、「食品検査」などに行
き、住民との意見交換も行います。学

福島の人間が 廃炉を進められるように

東日本国際大学 吉村作治 学長



多くの
若い人材を
育てて
いきたい

東日本国際大学の学長を務めなが
ら、エジプト考古学の研究を続けていま
す。何のデータもない人が発掘できるか
と云えばできません。

今後、原発は廃炉が進められます
が、原発事故への対応もデータもない
のに関わることはできません。

福島県立医科大学の副学長となった
山下俊一先生と4年前にお会いし、デー
タを理解できる文化系の人材を育てた
というお話をしたことがありました。そ
れがきっかけとなって、長崎大学と福
島県立医科大学による共同大学院の協
力を得ることができ、東日本国際大学
の学生と、いわき短期大学幼児教育科
の学生に川内村での様々な体験学習を
含む集中講義をしていただいています。

講義や体験学習がきっかけになり、昨
年は、短大幼児教育科の学生が、川内
村の認定こども園に就職しました。多く
の若い人材を育てていきたいと頑張
っているところです。

今後、福島県の復興は、福島の人間
がやる必要があると考えています。東日
本国際大学では、2017年に福島復興
創世研究所を開所したほか、福島工業
高等専門学校とも提携し、廃炉に関与
できるような人材育成を進めます。



川内村のワイン畑を散策する
ジャック・ロシャル教授と学生